そこにある美

雨音多一

1

　美しいのは目ではない、心である。目は心を表す。心が外見に一番あらわれるのは目である。憂いを含んだ瞳が僕に向けられた時、心を射抜かれたかのような気分に陥る。美しさ刃が煌めくような輝きが、閃く。目と目が合った時、言い知れぬ感覚が心をうち震わす。「瞳」は全てを現すのだ。

「ただいま」
「あら、お帰り。早いわね」
「うん、今日は打ち合わせだけだったんだ」
　３ＬＤＫのマンションの一室。ここが僕の住み家だ。デザインの仕事のために、一部屋充てている。後はベッドルームと居間である。妻をめとって一年余り。この夏の日差しのように、人生は煌めいていた。
　僕はフリーランスで、グラフィック・デザインをしている。デザインの仕事は、主に印刷所からの依頼だった。ひいきにしている印刷所が三〜四件ありあり、そこからの依頼である。もう一つはデザイン事務所からの外注作業。デザイン事務所からの注文は、単価が高いものが多いが、その反面、クオリティを要求される。だから、デザインを仕上げるのに時間が掛かるのだ。
　今日はデザイン事務所との打ち合わせだった。原稿を貰って、内容の説明を聞いてきたのだった。

「今度のデザインに、似顔絵のカットを入れたいんだけど、ちょっと描いてくれる？」
「いいわよ」
　妻はイラストを描く仕事をしている。「未来（みく）」という名はペンネームだ。ほとんど本名のように使っている。
　グラフィック・デザイナーの僕と仕事をはじめて五年余り。昨年の九月に入籍した。新居に引っ越してきて、一年近くが経とうとしていた。
「この写真なんだけど、これで大丈夫かな」
「どれどれ。……大丈夫、全く問題ないわ」
　妻の未来に写真を手渡しながら、そんな会話を交わした。
　未来は二十七才。結い上げた髪がやさしく揺れた。未来は細面で整った顔立ちをしている。小さな手が様々なイラストを生み出していく様は驚きだった。僕はあまり絵を描かない。主に観る一方である。
　絵とは不思議なものである、とつくづく思う。精緻なものだけが良いとは限らない。力の抜けたイラストや漫画のようなものを好む人も多い。問題なのは、描画する際のタッチである。テーマや心情にあわせた雰囲気が全てではないか、と僕は思っている。
　その点で妻の未来の描く絵は優れている。美しいのだ、全てが。絵に言葉は要らない。全てが物語られている。全てが綴られているのである。

　僕の名前は米山尚次。四十一才。田舎暮らしが好きで、都会からこの十万人都市に引っ越してきた。引っ越してから十年余り。若い時からグラフィック・デザインの仕事を続けている。絵は昔良く描いていたが、最近は観る一方である。特に日本画が好きで、画廊やデパートでの展示を観に行くことが多い。この小さな街にも画廊は幾つか有って、どの画廊とも顔なじみである。特に、「ギャラリー・シナモン」とは十年来の仲だ。

「未来、今度ギャラリー・シナモンで洋画の個展があるんだ。一緒に行くかい？」
「あら、いいわね。どんなタッチ？」
　僕は、さっき玄関のポストに届いてたギャラリーの案内状を未来に見せた。
「この作家さん、抽象も具象もするのねぇ」
「珍しいね。タッチもいいな」
「じゃあ、来月の日曜日に行ってみましょうか」
「そうしよう」

　連れだってギャラリーや美術館へ行くのが僕ら共通の趣味である。買うことは余りないのだが、普段外へ出ることの未来には、いい気分転換になっているようだ。僕はというと、常に打ち合わせや納品で出掛けることが多いので、その時、話の素材に使っている。クライアントのところへ行って、最近観た展示の内容を話すと、面白がられたり、今度行ってみるよ、と言われたりする。趣味と実益を兼ねた娯楽なのだ。

「そうそう。江戸川さんが、午後からいらっしゃるそうよ」
「何の用だろう？」
「さあ。ギャラリーがどうとか言ってたケド……」
「分かった。じゃあ、お昼にしようか」
「そうねぇ。お素麺でも茹でようかしら」

「有難い」

2

　玄関のチャイムが鳴った。
「こんにちは」
「あなた、江戸川さんがいらっしゃいましたよ」
　未来がリビングへと江戸川さんを通した。
　江戸川さんは、七十才位の好々爺で、同じ市内に住んでいる。いつもは、デザインの注文をくれるのだが、今日はいつもと違うようだ。江戸川さんは中肉中背で、すこしふっくらとした顔をしている。その顔を見ると、僕は大黒様を思い出すのだ。いろいろな仕事をくれる、福の神のように思う時も度々あった。

「尚次くん、これお土産」
「有難うございます」
「早速だけど、頼みがあるんだ」
「何でしょう」
　僕はお土産を受け取りながら、尋ね返した。
「実はね、ギャラリーをつくろうと思っているんだ。そこで、君にアドバイザーを頼みたい」
「僕にですか？」
　驚いて訊き返してしまった。
「それは、名誉なことですが……」
「もし良かったら、力を貸してくれないだろうか」
「……少し考えさせてください」
「今のところ決まっているのは、私が持っている蔵を改装して使うこと位だ」
「ああ、それは良いですね」
　僕は頷いた。
「今、悩んでいるのは、ギャラリーの名前なんだ」
　丁度その時、未来がアイスコーヒーを二つ持ってきた。
「あら、何のお話？」
「実は今、ギャラリー建築のアドバイザーを頼まれたんだ」
　僕は興奮していた。
「素敵じゃない」
「なかなか、ウンと言ってくれないんだよ」
　江戸川さんが苦笑いする。
「あなた、引き受けたら？」
「……そうだね、よし。江戸川さん、是非協力させてください」
「良かった。安心したよ」
「ギャラリー巡りは唯一の趣味のようなものですからねぇ。力を発揮できるといいのですが」
「私も、何かお手伝いいたします」
「有難う。心強い」江戸川さんが微笑む。
「君さえ良ければ、これから蔵へ案内したいんだが、どうだろうか」
　僕は未来と目を合わせた。未来が頷く。

「分かりました。それでは一緒に行きましょう」

3

「ここが、私の蔵だ」
「素敵な場所ですね」未来が溜め息をついた。
　蔵は田畑の一角にあった。近くに集落もあるが、殆ど田園の真ん中である。すぐそばに母屋があり、そこが江戸川さんの住まいなのだという。江戸川さんは四人家族である。商社勤めの息子とその妻。そして孫娘の四人。つれあいを半年ほど前に亡くし、傷心の日々を過ごしていた。愛妻家だった江戸川さんは、今回のギャラリーを亡き妻の為に建てたいのだという。生前、キルトを趣味としていた妻の作品を飾りたい。そう、江戸川さんは車中で話してくれた。
　それだけでなく、一般にも貸し出して、地域の美術家の集まる場所にし、地域文化に貢献できれば嬉しい、とも語ってくれた。

「庭ももう少し手入れしようと思っているんだが……」
「いいですね。花の垣根やアーチなどはどうですか」
「素敵ね」未来が目を細めた。

　蔵はかなり大きく、二階もギャラリーとして使えそうだった。
「カフェなどを併設したらどうでしょう」
　僕は思いつくままに言葉を紡ぐ。
「一階はカフェ、二階はギャラリー」
「いいわね」
「メニューは何がいいかな」と江戸川さん。
「季節の野菜などはいかがでしょう？」未来がそっと告げる。
「例えば、夏野菜のカレーとか……」
「いいね」僕は矢継ぎ早にアイディアを出す未来に感心した。
「あ、あと照明とピクチャー・レールが必要ですね」と僕。
「ああ、そうだね」
「絵は……、そうですね、百二十号、いや百五十号位までなら大丈夫だと思います」
「その位入れば、何とか形になるとわね」
「でも、二階に飾れるのは、五十号サイズ位までででしょうか」
「ああ、階段があるからか」江戸川さんが間に入る。「それと照明はどうだろうか」
「今はいいのが出てますからね、特に問題は無いと思います」
「良かった」未来が微笑んだ。
「内装は丸ごと変えた方が良いでしょう」
「だいぶ傷んでいるからなぁ」江戸川さんが洩らした。
「あちらの奥がキッチン向きね」
「そうだね」

　帰りの車中で江戸川さんは、ずっと何かを考えているようだった。
「考え事ですか」
「ああ、ギャラリーの名前をどうしようかと思ってねぇ」
「名前ですか」未来が小首を傾げた。
「そうですねぇ。古い蔵だから、漢字が良いんじゃないかと思います」
「例えば……、『瞳』というのはどうだろうか。亡き妻の名前なんだ」
「『ギャラリー　瞳』ですね……」未来が口のなかで何度か繰り返した。
「いいんじゃないかな」と僕。

　「物を創る」ことは容易なことでは無い。ゼロから何かをはじめること、それは努力ではない。それはスタンスである。伝統を継ぐのではなく、全く白紙の状態からのスタート。

　それは、デザインする時に、白紙のコピー用紙にラフ・デザインを描くようなものである。型にはまることなく、何かを生み出すためにはコツがいる。だから「努力」ではなく、「才能」でもなく、「スタンス」なのだ。

4

　工事がはじまった。僕を中心にして、リフォームのプロと対話すること半年。季節は春を迎えていた。長い冬の間に出したアイディアが芽吹く時。雪国の人々にとって、春は輝かしい季節である。雪どけの水に、春の匂いを感じている。水芭蕉が咲き始めた。三月上旬、僕たちのギャラリーもまた、多くの草木と同じように、春を謳歌しようとしていたのだ。

「尚次君と未来さんに、紹介したい人がいるんだ」
　僕に江戸川さんからの電話があったのは三日前のことである。

「こんにちは」
　まだうら若い女性だった。聞けば江戸川さんの孫娘である。
「孫の『ひさき』だ」
「ひさきです。ギャラリーの店番を願い出たんです。宜しくお願いします」
　素直な声だった。
「ひさきちゃんね。私、イラストレーターの未来といいます。宜しくね」
　ひさきちゃんが握手を求める。
「お噂は祖父から聞いております。こちらこそ宜しくお願いします」
「随分と礼儀正しいね。僕が米山尚次です。これから何かとお世話になると思うけれど、宜しくね」
「はい。私も全力で頑張ります」
　傍にいた江戸川さんが嬉しそうに微笑んだ。
「今、高校生なんです。学校があるんですが、日曜日が空いているので、その日にギャラリーの店番をすることになったんです」
「お小遣い程度のアルバイトだよ」
　江戸川さんが相槌を打つ。
「美術が好きなんです。大学も美大に行こうと思っているんです」ひさきちゃんが恥ずかしそうに洩らした。
「ああ、そういう事なら勉強にもなるね」と、僕が応じる。
「あら、素敵だこと。昔を思い出すな」未来がほほえむ。
「青春のヒトコマだね。僕も若い頃、そんな時があったな」
「あら、私の知らない頃ね」未来が茶化す。
「そのようだね」江戸川さんはおかしそうに頷いた。
「僕にだって、子ども時代はありますよ、ねぇ、ひさきちゃん」
「はぁ」
「これこれ尚次君。あんまりイジメないでくれよ」
「大丈夫です」と僕。
「ホントかしら」未来が合いの手を入れる。
「大丈夫だって。昔から言うだろ、『可愛い子には旅をさせろ』って。様々な社会経験が大事なんだよ」
「本当に宜しく頼むよ」江戸川さんが少し不安げに洩らした。
「絶対に大丈夫です」僕は胸を張った。

　ギャラリーの前に僕と未来とひさきちゃん、そして江戸川さんが立っている。完成を記念して、写真を撮るのだ。
「ハイ、撮りますよ」

　美しいのは目ではない、心である。目は心を表す。瞳が全てを物語る。美しさに出会う時、人は心を震わせる。美に畏敬の念を覚えるように、人はよき日を想う。その点で、ギャラリーは過去へ戻る場所のようである。一点一点の絵が示すのは、心の在り方だ。心の捉え方だ。美は形に表れる。それは心のスタンスである。だから、人は美に打ち震えるのである。
　美は想いと直結する。「何を発したい」のか、「何を発する」のか。その発信源の想いが重要なのだ。
　美はどこにでも存在している。どこにでも転がっている。それは路傍の花かも知れない。それは一幅の掛け軸かも知れない。問題は、それを如何に掴むか、なのだ。それは「想い」を汲むことに他ならない。

　だから、「美を感じとる」こととは、「想いを感じる」ことと等価なのだ。

（結）

そこにある美

http://p.booklog.jp/book/130123

初版　2020年2月20日

著者 : 雨音多一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/130123

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：デザインエッグ株式会社